

国語シリーズ 8

文
部
省
編

現代かなづかいの意義

統 計 出 版

刊 行 の 趣 旨

国語シリーズは、国語の改善と国語教育の振興に関する施策を普及徹底するために編集するものであります。

このシリーズは、国語問題編・国語教育編・国語生活編および国語教養編として、それぞれ逐次刊行する予定であります。

問題編は、主として国語審議会の発表した事がらを、教育編は、国語指導の方法などを、生活編は、国民の言語生活に関する事を解説するものであり、教養編は、一般の国語教養を高めることを目的とするものであります。

なお、この本は国語問題編の1巻として国学院大学教授文学博士金田一京助氏に執筆を委嘱したものであります。

昭和 27 年 3 月

文部省調査普及局国語課長 原 敏 夫

目 次

緒 論—国語史序説……………	1
上代国語の音韻と真名……………	5
古代国語の音韻とかな……………	9
中世国語と実行かなづかいの創始……………	4
近代国語と古典かなづかいの発見……………	19
現代国語とかなづかい問題の興起……………	30
現代かなづかい案の公布……………	35
現代かなづかいの精神……………	39
現代かなづかいの要約……………	54
結 論—古典時代の精神の伝統……………	58

緒 論 国 語 史 序 説

人類のコトバ、鳥獣のコトバと並べていうことがあるけれど、鳥獣のコトバは、実は「言語」以前の音声表出であり、人間ならば感声というもののすなわち、喜怒哀楽の「声」にすぎないところのものである。だから、やはりあれは鳴き声であって、ただ人間の音声言語に類推してたとえに鳥獣のコトバと呼ぶまでである。

それゆえに鳥獣のコトバは、まったくかれらの自然声であって、ひとりでに覚えてあのようにそれぞれが鳴くのである。

人類言語はそうではなく、生れ落ちてから周囲の人々の話すのを経験して成長をする間に一語一語、まねをして、まなんで、まなび覚えて片言時代を経て、一人前になって、はじめて一人前に話すようになる。

だから、人類言語は、自然的存在ではなくして、伝承によって存在する、伝承的言語である。

伝承的言語の特質は、変遷をすることである。自然的にあるのではなく、一に伝承しだいで、伝承に規定されるからである。

われわれが、「人」を「ひと」と言うのは、そういうことが自然だからではなく、またいちばん適切だからでもなく——何がいちばん適切だかわれわれにわかることではない——単に、生れ落ちた社

会の周囲が「ひと」とそれを言っているのを聞いて育つから、つい、そう言って成長するまでである。すべての単語みなそうである。文法もそうである。

だから、もし、周囲が「人」をマンと言っている所に生れるなら、われわれもマンと覚えてそう言う。メンシュという所に生れるなら、メンシュという、ホモという所に育ったらホモと覚えてしまうであろう。「人」は決して「ひと」に限るのではなく、単に伝承によってたまたまそうわれわれが言うのにほかならない。

いわば、単語は一々ただそのものの符号にすぎない。符号は、ただ外的にそのものへ結びついていて、別段、内的の関係が結びついていないことを要しない。だから、方言によっては、ヒトがフィトとも言われ、フトとも言われ、ピトとも言われている。原始日本語では、ピトだったはずであり、奈良時代・平安時代・中世時代にかけては、フィトだった。だから、今でも、最も古色を伝えている琉球語の最南端の宮古島・八重山島でピトと言うのであり、また、今なお中世のおもかげを残していることの多い奥州や出雲や、沖繩本島はフィトと言っているのである。中部方言はヒトとなったが、これは江戸時代以降の変化なのである。

言語というものは、このように、時代から時代へ、変化をするのが常である。それは、大川の流れの、流れるとも見えないようで、昼夜をおかず流れているように、時代から時代へ、ゆうゆうとして、間断なく、やまず流動しているのが、人類言語のほんとうのあり方

である。

鳥獣の鳴き声には、古今の差もないのに、言語には、どここの言語にも、上代語・古代語・中世語・近代語・現代語があるゆえんである。

言語のこの変化ばかりは、どんな権力をもってしてもささえることはできない。どんな法律を設けても、これをさし止めることはできない。知らないうちに変わっているのであるから。

変化は、人類言語の本性であり、宿命である。言語の発達も進化も、すべては変化の内にあるのであって、変化をよそにしては言語に進化も発達もない。

もしも言語に変化を否定したら、言語は死んでしまう。というのは、言語の生命に目を閉じ、言語の全歴史を見ずにしまうことである。

この変化を、大きく肯定することによってのみ、生々発展するわれわれの言語の真生命がはつらつとしてその真相をわれわれの眼前に展開するのみである。

いつ、どここの言語でも、完成したものではなく、言語は、すべて生々発展の途上にあるものである。

言語ないし国語の問題を処理し、もしくは考量するときには、まずこの事をはっきりと意識してなされなければならない。これを忘れては、大事な判断を誤る恐れがあるからである。

実は、われわれの弱さ、どうかすると、日常のことに心が慣れて、

この見やすき事実を見忘れ、知らず知らず言語の「変化」を否定する誤りに陥ることがある。

それは何か。

たとえば、こういうときがそれである。蝶々は「てふてふ」で、昨日・今日は「きのふ・けふ」である、そのみが永久に真実で、今これをチョウチョウと書いたり、キノウ・キョウと書いたりすることはあるべからざることだと思ふ類がこれである。

こういう思いをすることは、決して少なしとしない。なぜだろう。どこからこういう気持が養われているのであろう。驚くべき「変化の否定」である。

この気持は、無意識に、言語というものを、すでにできあがったものとして、不断に変化するものだったことを、うっかり見のがした気持なのである。

こういう気持を養うのは、常に、言語の実習時間、すなわち学校の教室内部におけるふんい気である。なぜなら、すべて言語の実習——国語・漢文や英語の時間にはしばらく言語をば、できあがったもののように取り扱って、教えもし、習いもするからである。

言語の実習には、そう取り扱うことは必要なことである。もしも、言語が、ふらふらしていて、動いていては捕えようがなく、「こうだ」と教えようがないからである。だから、実習の時間には、しばらく言語をすでにできあがったものとして教えるよりしかたがない。

そこまではやむをえない、むしろ、最も必要なことでさえある。大事なことは、それに慣れて、実習以外のときにもそういう気持ちから抜け切れないことではしかたがないということである。そこは人間の弱さである。「てふてふ」「きのふ・けふ」を未来永劫^{ごう}の真理と思い込むのは、実習時間の教室気分の延長以外の何物でもない。

国家百年の大計を建てようとするようなときには、この教室で養われた気分を超越して言語そのものの本質を、高所・大所から見わたして考えきわめなければならない。そういう見方を学ぶには、国語の歴史的認識を深めることがいちばんである。

上代国語の音韻と真名^な

最近の国語学の最大の発見、現代国語学がそれによって一新時期を画すといわれるものは、橋本進吉博士の上代国語におけるいわゆる13の特殊かなづかいの発見である。

これによれば、奈良時代の音韻は、50音どころではなく、濁音を別にしても62音ほどになろうとする。すなわち、キヒミケヘメコソトノモヨロの13には、おのおのに甲乙2類の書き分けが記紀万葉に存することで、これは、音の相違に基く。しかも、子音の差ではなくして、母音の差だというのである。たとえばイ列に、-i と -ï とを分ち、エ列に -e と -ë とを分ち、オ列に -o と -ö とを分

つ類である。-i -e -o を甲類と呼び -i -ë -ö を乙類と呼ぶ。この乙類の実際の音価については、今日のところ、だいたい中舌音か、もしくはウムラウトのような混合母音とあたりがつけられる。

それで、キの2類についていえば、咲き・行き・置き（四段活のキ）、着（一段活のキ）・雪・来・衣の^{きね}きは甲類のキ ki であり、起き・^よ尽き・^よ避き（上二段のキ）、月・木・城等の^ききは乙類のキ kī である。甲類のキは、^き祁・^き吉・^き棄・^き枳・^き企・^き支等で書かれ、乙類のキは、^き紀・^き記・^き奇・^き幾・^き貴・^き氣等で書かれる。

同様に、ケの2類も、甲類のケ ke は^け祁・^け計・^け奚・^け鷄・^け溪等で書かれる四段活の命令形、咲^け・行^け・置^けの^け、また存在態の咲^けり・行^けり・置^けりの^け、等であって、乙類のケ kē は、^け氣・^け既・^け階・^け戒・^け開で書かれる四段活已然形の咲^けば・行^けば・置^けばの類の^け、下二段活、^ま設^け・^ま解^け・^ま避^けの^け、酒・竹・嶽・菅の^けの類がこれであった。

コ の2類の甲類 ko は、古・固・故・枯・姑・顧・孤の類で書かれる子・彦・小・^{かこ}籠・^{をのこ}水手・^{をこ}男・男子・の類の^ここ、乙類 kō は、許・居・巨・己・挙・渠・^こ虚の類で書かれる^こ此^こ處・^こ事・^こ言・^こ琴・^こ心・^こ所・^こ床・^こ常・^こ木の類の^ここである。

なお、イ列のヒミについていえば――

まずヒの2類についても、甲類（比・辟・譬・卑・毘・鼻）は、やはり四段活の連用形、思ひ・賜^{たま}ひ・喜^きひ等々のひ（び）、人・姫^{ひめ}・日等のひの類、乙類（斐・肥・備）は、やはり上二段活の恋^こひ・忍^にび等のひ（び）、火^ひ・干^ひ・甲斐^{かひ}・肥前^{ひんご}・肥後^{きび}のひ、備前・備後・吉備のびの類がそれである。

また、ミの2類についても、甲類（美・弥・御^み）はやはり四段活連用形、読^くみ・汲^くみのみ、君^{かみ}・上^{かみ}のみがそれであり、乙類（微^み・未^み・身^み）は、また上二段の恨^こみ・妻籠^こみのみ、神・身・実^みのみの類がそれであった。

甲類のキヒミは、音便を起すけれども、乙類のキヒミには音便がない。そして、乙類のキヒミには母音交替の法則があつて、月^{つき}一月^{つき}、木^き一木^こ、火^ひ一火^ほ、身^み一胸^{むね}（身根）のような変化が名詞・動詞・形容詞に通じてあつた。（有坂秀世博士「国語音韻史の研究」）

同様に、その他のヘメソトノヨモロにも、それぞれ甲乙2類があつて、語によって厳密に書き分けられていたこと、古事記・日本書紀・万葉集に通じての一致であつた。（もっとも、モは古事記にだけはっきり2類があり、日本書紀・万葉集には、混同が起つていた）。しかし、これは大和地方^{やまと}の言語の上のことであつて、地方の方言には、相当の混用が始まっていた。

上代音韻図

奈良時代を仮想す

ア 行	阿 a	伊 i	宇 u	衣 e	於 o
カ 行	加 ka	伎紀 ki kī	久 ku	計氣 ke kē	古許 ko kō
ガ 行	語頭	賀 ga	岐宜 gi gī	具 gu	下碍 ge gō
	語中 語尾	賀 ŋga	岐宜 ŋgi ŋgī	具 ŋgu	中碍 ŋge ŋgē
サ 行	佐 ca	之 ci	須 cu	世 ce	蘇曾 co cō
ザ 行	邪 ja	士 ji	受 ju	是 je	俗叙 jo jō
タ 行	多 ta	知 ti	都 tu	天 te	斗登 to tō
ダ 行	語頭	陀 da	尼 di	豆 du	提 de
	語中 語尾	陀 nda	尼 ndi	豆 ndu	提 nde
ナ 行	那 na	尔 ni	奴 nu	弥 ne	怒能 no nō
ハ 行	波 fa	比斐 fi fī	不 fu	幣閉 fe fē	保 fo
バ 行	語頭	婆 ba	毘備 bi bī	夫 bu	辨倍 be bē
	語中 語尾	婆 mba	毘備 mbi mbī	夫 mbu	辨倍 mbe mbē
マ 行	末 ma	美微 mi mī	牟 mu	売米 me mē	毛母 mo mō
ヤ 行	也 ya		由 yu	江 ye	用余 yo yō
ラ 行	良 ra	利 ri	留 ru	礼 re	漏呂 ro rō
ワ 行	和 wa	為 wi		惠 we	乎 wo

注 cはtʃあるいはts, jはdʒあるいはdz.

古代国語の音韻とかな

大和^{やまと}から、都が山城に移って平安時代にはいると、13 の特殊かなづかいがたちまち異変に会ってしまう。その初頭には、まだ多少は2類の区別を存したが（たとえば仏足石の歌や古事談など）、中ごろからは、まったくその別がなくなってしまうから、平安時代の作であるかな文字は、濁音や拗音を除けば50音でじゅうぶん間に合うほどの発音に統一されてきたのである。

五十音図は、平安時代人の作であるが、これはだいたいその時代の口に合わせて作られたものではあるが、反切を一目にわかるために作られたものであって、必ずしもその時代の音節を数え合わせたものではない。それゆえ、ワ行のウ列とヤ行のイ列とは、実存したために設けられたものではなく、理論上ありうべきものであるために置かれただけにすぎない。なぜなら、この二つの区別は、奈良時代の真名にさえ、存しなかったものである上に、口に合わせて時代のことばを書こうとしてできたかな文字の数が、いろはの47字もしくはせいぜい48字にすぎなかったことからめいりょうである。

かな文字を学ぶ「手習^{てなひ}の詞」の最古のものと思われる、いわゆる
あめつち
天地の詞は

あめ(天)つち(地)ほし(星)そら(空)やま(山)かは(川)みね(峯)
 たに(谷)くも(雲)きり(霧)むろ(室)こけ(苔)うへ(上)すゑ(末)
 ゆわ(硫黄)さる(猿)おふせよ、え(榎)のえ(枝)を、なれぬて。

の 48 字であった。江の草体江と、衣の草体のえとで、ヤ行の ye とア行の e とを書き分けていたからである。すなわち、絶エ・消エ・越エ・冴^さエ・燃エ・煮エ等のエは ye であった。名詞では枝のエ、兄弟^{えい}のエ、入江のエなどがそれであった。

これに対し、「得」の未然形および連用形のエはア行のエで、e であった。名詞では榎^{えのき}のエ、愛媛^{えひめ}のエ、荏^{えごま}のエなどがそれだった。

この区別は、記・紀・万葉にはもちろん、平安にはいっても、靈異記や、仏足石の歌にはまだはっきり書き分けられている。平安初期の経卷のふりがなにも明らかに区別されていた。たとえば、大矢透^{かな}「仮名字体沿革資料」参照。

それが、いつから 47 字になってきたか。平安時代、天地の詞の 48 字を頭に 48 首の歌を詠むことが、ちょっとはやった。

藤原有忠・源順・相模^{さがみ}など。

相模は、ye と e とをちゃんと区別している。相模集に、48 首全部は載せていないが、載っている部分がちょうど、これを見るに間に合う部分である。すなわち、「榎の枝」の部が、次の歌になっている。

得^えこそ寝ね冬の夜深く寝覚めして冴^さえまさるかな袖^{そで}の氷の
 枝寒み積れる雪の消えせねば冬と見るかな花のときはを

相模は少なくとも、得と枝との相違を詠み分けている。

しかるに、源順のは、すっかりこれを混じてこうなっている。

えも言はで恋のみ増る我が身かないづこや岩におふる松が枝

えもせかぬ涙の川のはてはてやしひて恋しき山はつくばえ

しかも順は、「藤原有忠は、歌の頭にのみ用いたが、自分は下にも同じ文字をすえる」と揚言して、48首は作っているけれど、41首目（ア行のエ）も、43首目（ヤ行のエ）も、「得こそ何々」という同一の語を平気で用いて、ア行とヤ行との差別を知っていなかったことをみずから暴露している。おまけに、下にも同じ文字をふませるといって、41首目は、頭がア行の得、下がヤ行の枝を用いて、このかなの異なることを気がつかない。当時一流の学者で、勤子内親王のために、倭名類聚鈔わみよるいじゆうしやうを著わしているのに、この本にもやはり、ア行・ヤ行のエ列の区別が没了されているのを照し合わせて、平安の中ごろ、この区別が一般になくなってきていたことを知るのである。

だからこそ、紀貫之きのつらゆきの土佐日記も、あえてこれを書き分けない。いや、竹取物語も、源氏物語も、枕の草紙も、古今集もである。ましてそれ以下の日記や物語や歌集、みなである。いや、これらは、ひとりひとりとえとを書き分けないばかりではない。すでに区別のなくなった13の特殊かなづかいの2類の差などは、全然書き分けず、日常口にするそのことばを、ただ口に合わせて、かな書きに自由に書き流して行ったからこそ、国民文学の黄金時代を現出するほどか

な文学がだれにもだれにも書かれたのである。

もしこれを、前代の書き分けを守って、書きつけよと命ぜられるとしたら、一流の学者の源順さえ書くことができなかったはずである。これがすなわち、時代による言語の変遷である。

平安時代も、源平時代までくざると、またその上に発音の変化が起っていた。語の中や下にくるはひふへほが、ワ行と同じく wa, wi, u, we, wo と発音されてくる。たとえば、沢・川・顔・棹・塩・願ひ・思ひ・恋ひ等々がサワ・カワ・カヲ・サヲ・シヲ・ネガキ・オモキの発音になったのである。前の母音の引き続きで、はひふへほが自然に有声化してきた現象である。

古 代 語 音 韻 図

平 安 中 期

ア 行	あ a	い i	う u	え e	お o
カ 行	か ka	き ki	く ku	け ke	こ ko
ガ行 語 頭	が ga	ぎ gi	ぐ gu	げ ge	ご go
ガ 語中 行 語尾	が nga	ぎ ngi	ぐ ngu	げ ngē	ご ngō
サ 行	さ sa	し si	す su	せ se	そ so
ザ 行	ざ za	じ zi	ず zu	ぜ ze	ぞ zo
タ 行	た ta	ち ti	つ tu	て te	と to
ダ行 語 頭	だ da	ぢ di	づ du	で de	ど do

ダ 語中 行 語尾	だ nda	ぢ ndi	づ ndu	で nde	ど ndo
ナ 行	な na	に ni	ぬ nu	ね ne	の no
ハ 語頭	は fa	ひ fi	ふ fu	へ fe	ほ fo
ハ 語中 行 語尾	は fa	ひ fi	ふ fu	へ fe	ほ fo
バ 語頭	ば ba	び bi	ぶ bu	べ be	ぼ bo
バ 語中 行 語尾	ば mba	び mbi	ぶ mbu	べ mbe	ぼ mbo
パ 行	ぱ pa	ぴ pi	ぷ pu	ぺ pe	ぽ po
マ 行	ま ma	み mi	む mu	め me	も mo
ヤ 行	や ya		ゆ yu	江 ye	よ yo
ラ 行	ら ra	り ri	る ru	れ re	ろ ro
ワ 行	わ wa	ゐ wi		ゑ we	を wo

末期に
wa, wi,
u, we,
wo とな
って語頭
と分化す。

中期に
yeがe
となる

それで、この時代の歌では、もちゐ（用）をもちひ（餅）へ掛けたり、しゐ（四位）をしひ（椎）へ掛けたりするようになる。同音となったから、そう聞かせることができたからである。源三位頼政^{よりまさ}が、平家の代で、同じに四位になった平家の公達が三位に登っても、源氏の自分がいつまでも四位に、ほったらかされていることを後白河法皇へ訴えるのに、

のぼるべきたつき無き身は木のもとにしひを拾ひて世をわたる

かな

と詠んで、その意味が通じたのが、しひとしゐが同音であったから
のことである。

掛け詞は、それまで同行の語の間でのみ行われていたのに、院政
時代から、それが乱れて、異なる行の間にも行われるようになった
と難ぜられるのは、このワ行・ハ行の間に掛けて行われることをさ
すのであった。難じるほうが無理で、発音の変遷があって、同音に
なった以上、同行と同じ効果をもつから、理解にいっとうさしつか
えがなく通用したことを認識すべきである。

中世国語と定家卿^{きやう}かなづかい

時代がくだって、中世に入り、鎌倉時代^{かま}の初頭へさしかかると、
唇音退化^{しん}の風潮（これは前々からあって、ハ行音を p から f へや
わらげてきた）が、wa, wi, u, we, wo を襲ってその w を落ち
させる。たまたまア列だけは、大きくくちびるを開く反動が働いて
w がはっきり残るが、他は異変を起す。その結果、語中・語尾のひ
ふへほとア行のいうえおと、ワ行のゐうゑをとがみな同音に帰して
しまう。

同音のかながそのように増加するから、鎌倉初頭の巨匠、藤原定
家でも、この3行に関するかぎり、あたかも前代の源順が混迷に陥
った轍^{てつ}をそのまま踏んで——言語の変遷には時代の大家でもそんな

微力なもので——自分の歌集、拾遺愚草の草稿でも、同じ語を、前と後とでまちまちに書いていた。清書を頼まれたしゅうとの源親行^{ちかゆき}がそれを注意して、この際、書き方を語によって一定されるがよろしかろうと建言する。定家は、それを認めて原案を親行に出させて合点したものだ^{づかい}と伝える「仮名文字遣」(行阿^{ぎょうあ}が増補したから「行阿仮名遣」とも)がある。

もっとも、この本の序文には、定家は、全部を賛成したように書いてあるが、世に、「下官抄」^{げ かん}というものがあって、このほうが定家のものだといわれるし、行阿の増補以前のもと思われる「定家仮名遣」というものも世にあって、どちらもいたって簡単なものである。それでいて以上全部に共通なことは、「置く」が「をく」で、「岑の上」は「おのへ」とちがっていること、「をのこ」は「を」で正しいが、「男」は「おとこ」とあること、「故」が「ゆへ」、「行くへ」が「ゆくゑ」であること等々が共通である。そのせいか、中世の本は、堂々たる大著述もよくこう書いているものである。

さて、「行阿仮名遣」も、普通「定家卿仮名遣」として世に行われているのであるが、その編集ぶりを見ると、「下官抄」も、前述の「定家仮名遣」も「を」「お」、「え」「へ」「ゑ」、「い」「ゐ」「ひ」の8(あるいは「ほ」を加えて9)字のかなづかいであるのに、「わ」「は」、「む」「う」「ふ」を加えて14字のかなづかいである。目録には巻末に、「一 定家卿^く口伝、二 人丸秘抄」とあって、本文にはない。この「定家卿口伝」というのが、さきに言ったごく簡単な「定家仮名遣」というものにあたり、

(福井博士「国語学大系第九」),「人丸秘抄」というものも、ほぼ同じのものであって、やはり簡単な8, 9字だけのかなづかいにすぎない。行阿の増補の部分がそれでだいたいわかるのであるが、語数の増加ばかりでなく、驚いたことには、今まであげた諸本に見えてない新意見の加わっていることである。

をそれ おそるの
時はお也

きをひむま競馬 きおふの
時はお也

をやこ おやの時
はお也

こをけ 小桶 只をけの
時はお也

曉をき おき別の
時はお也

露おもみ おもきの時もお也
をもしの時はお也

花をおる 花をたをる
の時はお也

おけ 桶 こをけの時
はをなり

きおふ きをひ馬の競
時はお也

おもむく をもむきの
時はお也

おととひ をとゝの
弟はお也

兄弟 おと
ととも

さえのかみ さいの神共
さゑのかみ共

道祖神

さゑのかみ さいとも
さゑとも

道祖神

こういう、先人の書にも、古典にもかつて聞いたことのない独断の

加わっていることである。これを、アクセントによって語を書き分けようとすると言って、仙源抄の^{ほつ}跋文で、長慶院がすでに非難される。

「中頃^{ころ}定家卿さだめたるとかいひて^{かの}彼家説を受くともがら、従ひ用るやうなり、おほよそ漢字には四声をわかちて、同文字も音にしたがひて心もかはれば、子細に及ばず。和字は文字一に心なし。文字あつまりて心をあらはすものなり……」

すなわち、邦語は、アクセントによってかなを替えて書く理由がないと論じておられる。そのよしあしは、ともかくとして、もしも定家にしろ、行阿にしろ、アクセントによってかなを替えて書く（この事を、大野晋氏がいちいち証をあげて、国語学会で証明されたそうである）としたら、どういうことを意味せねばならぬか。

これは、古典かなづかいを明らかにしようとする事とはまったく無関係で、実行かなづかいの企てであるから見なければならぬ。すなわち、これからどの語はどう書き、どう書き分けて行こうかという問題だったことである。ちょうど、今、政府が断行した、現代かなづかいと同種の「時代の口に合わせて」決めた当時の新かなづかい案である。政府とちがうところは、政府は、官報に発表して、みな、これについてくることを望んだのであるのに、定家卿や行阿は、他流には秘して、ただ自分たちの学派だけで、こう書いて、押し通して行こうという点だけである。

今まで、ほとんどすべての国語学史家は、この事を見落しているようである。

日本に生じた最初の「仮名文字遣」は、実行かなづかいだったので、後の世のかなづかいが、古典を読むために必要な知識としてのかなづかいだったのとは、かなづかいの名は同じでも、意義・目的はまったくちがうものであった。最初のかなづかいはむしろ現代かなづかいの一前例だったことをはっきりと認識しなければならない。

中世から以後の本が、「お」をとろうとうとして「を」と書き、「置く」を「をく」、「於て」を「をいて」、また「行く方」を「ゆくゑ」、故を「ゆへ」など書いていた。これは古代にはなかったことであって、中世文献の一特徴である。

江戸時代になっても、契沖^{けいちゆう}が出るまでの学者文人みなそうであった。一代のせき学^ら林羅山の古典「つれづれ草」の註釈たる「野槌^{づち}」などでもそうであり、芭蕉^{はしやう}の奥の細道などでもそうである。一概に誤りと見る前に、与えられた中世の事実として受け取らなければならない。

中 世 音 韻 図

拗音は省略した。

ア 行		あ a	い i	う u	え ye	お wo
カ 行		か ka	き ki	く ku	け ke	こ ko
ガ 行	語頭	が ga	ぎ gi	ぐ gu	げ ge	ご go
	語中 語尾	が nga	ぎ ngi	ぐ ngu	げ nge	ご ngo

末には η
と g とに
分化した

サ 行	さ sa	し si	す su	せ se	そ so	
ザ 行	ざ za	じ zi	ず zu	ぜ ze	ぞ zo	
タ 行	た ta	ち tsi	つ tsu	て te	と to	
ダ 行	語頭	だ da	ぢ dji	づ dzu	で de	ど do
	語中語尾	だ nda	ぢ ndzi	づ ndzu	で nde	ど ndo
ナ 行	な na	に ni	ぬ nu	ね ne	の no	
ハ 行	語頭	は fa	ひ fi	ふ fu	へ fe	ほ fo
	語中語尾	は wa	ひ i	ふ u	へ ye	ほ wo
バ 行	語頭	ば ba	び bi	ぶ bu	べ be	ぼ bo
	語中語尾	ば mba	び mbi	ぶ mbu	べ mbe	ぼ mbo
パ 行	ぱ pa	ぴ pi	ぷ pu	ぺ pe	ぽ po	
マ 行	ま ma	み mi	む mu	め me	も mo	
ヤ 行	や ya		ゆ yu		よ yo	
ラ 行	ら ra	り ri	る ru	れ re	ろ ro	
ワ 行	わ wa	ゐ i		ゑ ye	を wo	

末には語
頭と同音
に帰した

末には語
頭と同音
に帰した

近代国語と古典かなづかいの発見

中世の末から、近世の初頭すなわち江戸時代の初めにかけて、ま

た大きな音韻変化が起った。これは、われわれに「昔のことば」と「今のことば」とをわかつしめる「国語史上の大きな音韻変化」である。それは、どういう変化であつたか。

もともと母音二つを連ねて発音することのなかつた日本語に、漢字音の影響で古典時代から au, ou, eu, ai, ei と母音の重なるものができて、中世末期までできたが、ついにもとの本性がやっぱり出てきて、これらの重母式連音を、それぞれ一単母音にしてしまった変化であつた。

すなわち――

第一 ou—oo—ô の変化。

公工侯候口後等のこう (kou) をコー (kô) に。

共恭恐兇の類のきょう (kyou) をキョー (kyô) に。

曾僧層宋宗奏送の類のそう (sou) をソー (sô) に。

松鐘鍾頌訟の類のしょう (sou) をショー (shô) に。

登・等・藤・東・筒の類のとう (tou) をトー (tô) に。

重・寵・徴・澄の類のちよう (tsou) をチャウ (tsô) に。

したがって、純国語にも、次のような -ou の音があつたのがこの時代にいっしょにみな oo すなわち ô になった。

こふ(乞ふ・恋ふ)の発音の kofu (平安中期以前) から ko-u (同末期以後) になって鎌倉・室町を過ぎ江戸期にはいってコー (kô) に、とふ(問ふ・訪ふ)の発音の to-fu (平安中期以前) から to-u となつていたのが、この期からトー (tô) に、

思ふが, omo-fu—omo-u—omô に,

いと
厭ふが ito-fu—ito-u—itô に等々,

第二 au—oo—ô の変化。これは a と u とが互に^{けん}牽引して, a も o になり, u も o になった変化。すなわち,

央・桜・欧・謳のあう (au) がオー (ô) に,

孝・行・高・校の類のかう (kau) が, コー (kô) に

京・橋・郷・敬の類のきょう (kyau) がキョー (kyô) に

草・雙・相・想の類のさう (sau) がソー (sô) に

章・將・商の類のしょう (sau) がショー (jô) に等々。

したがって, 純国語の次のような -au の音がまたこの時代にみな -oo すなわち ô になった。

あふ (合ふ・逢ふ) の発音の a-fu (平安中期以前) から a-u (平安末期以後) になっていたのが, 江戸期にはいってオー (oo—ô) に

かふ (買ふ・飼ふ・^か交ふの類) の発音の ka-fu (平安中期以前) だったのが ka-u (平安末期以後, 鎌倉・室町を通じて) から, koo—kô に

同様に舞ふ・慕ふ・祝ふ・笑ふ・願ふ・ささふ・ねらふの類の -au も ô になって, これらがモー・シトー・イオー・ワロー・ネゴーとなった。

第三 eu (実は yeu) が yoo—yô となった変化。これも, e が u のほうへ, u が e のほうへ, 互に牽引して, どちらも o にあゆみ寄

って、oo すなわち ô になった変化。

幼・拗・妖の類のえう (yeu) がヨー (yô) に

教・喬・橋の類のけう (keu) がキョー (kyô) に

協・狭・俠の類のけふ (kefu) がキョー (kyeu—kyoo—kyô)

葉の e-fu (平安中期以前) から、e-u (平安末期から鎌倉・室町へかけて) だったのが、この期にまた yô に。

したがって純国語の酔^ゑふ (we-fu 平安中期以前) から eu むしろ yeu (平安末期から鎌倉・室町へかけて) だったのが、この期にはいつて、yoo—yô になった。けふ ke-fu (平安中期以前) から ke-u (平安末期から、鎌倉・室町へかけて) だったのが、この期にはいつて kyoo—kyô になった。

サ行のせう (せむの音便形) が、seu から syô となったのもこの期からである。ませう—マシヨ—, どうせう—ドーシヨ—等々。

以上のいわゆるオ列長音のあらわれは、二重母音式連音を中世400年かかって、こなししてしまい、もともと日本人の口に合うようにしてしまった音変化であるから、同じ条件のあらゆる面に向かって一様に起った大きな変化である。

だが、これによって、同音になったものの数が幾層倍して、どう書き分けてよいか、漢字音のほうは、漢字で書けば、かなづかいは知らなくても通るが、純国語は、かなで書かなければならない。そのため、知らず知らず口に合わせて書いたり、類推でやってのけたりしていた。

時代は、世が治まって学問が起り、その中から、契沖が古学に志して、古文献に目をさらすこと深くなるにつれて中世伝統のいわゆる「定家卿仮名遣」が、古典のかなづかいとは合致しないことを見て取り、つぶさに古典に典拠を求めて、古代のかなづかいは、かくかくであったということを五巻に書きあげたのが有名な「倭字正^{わじしょうぜん}濫鈔」であった。

契沖が、多年のうんちくを傾けて、こうして古典かなづかいを明らかにしてくれたのでこれをきっかけに、古学が江戸期に起ったのである。この知識なしには、まったく読めなかった古典が、これによってはじめて読めるようになったからだった。それゆえ、わが国学というものの存するかぎり、契沖の功績は、不朽であり、「倭字正濫鈔」はとこしえに記念される画期的な名著と言って過言ではない。ただし、これは、あくまでも古典かなづかい発見という点においてである。

契沖は、古典が書かれているかなづかいはこうだということを発見したが、古典時代を去ること 500年、日常のことばは、それから二重に発音の大変化を経てきている事実にかんがみれば、日常の言語生活における実行かなづかいは、どうすべきか、この問題は、また一つ考えて見てよい新しい問題だったはずだか、契沖はそれをどう考えたか。

一 古典の書かれているかなづかい

一 日常の言語生活に民衆の毎日使うかなづかい

契沖は、この二つを、二つとして考えることなしに、古典がこうだから、日常の毎日の用にも、一語一語、そのとおりに書くのが当然だと思い込み、そうひとりぎめしていたようなのである。だから、いわゆる「定家卿仮名遣」は、古典と合わないという点だけを強調して、それが実行かなづかいで、自分の発見した古典かなづかいと性質のちがうものだということに思い至らなかったのはぜひもない。

ところが契沖の発見によって勃興^{ぼっ}した国学の諸先達も、契沖の態度をそのまま継承したこと、好むところに知らず知らずとらわれていた誤り、ぬぐいがたいことである。

「倭字正鑑抄」に、誤りがあるとすれば、ことばの歴史観を欠いて、いわゆる「定家卿仮名遣」の意義を認識しなかったことである。だから、正濫抄の出たときに、すぐに「倭字通例全書」を書いて契沖を誤りよばわりした橘成員という人が現れた。契沖の「日本紀をはじめとする六国史以下、およそかなづかいの証とすべきものはみなこれを参照したということばをおうむ返しにして、古書のままでよいとしたら「かなづかひは無きなり」と駁^{はく}している。なるほど、実用かなづかいの立場からすれば、ただ古書どおりでよいのだったら何も問題なしに済む。ただ古書に従いさえすればよいから。古代と、発音のずれがあり、歴史がそこに大きく起っているから、古書をはなれて、古書は古書、今は今としてのかなづかいをわれわれは実行しているのだというのであって、一応道理なのであるが、この道理を従来国語学史家にひとりもくんでやる人がなく、橘成員は、とんでもない

世迷い言を言って、輝かしい契沖の名著にどろをぬると指弾しているようである。

契沖その人も成員の言うところに少しも耳を貸さず、ただよこし
まな説を成すものとして、「倭字正濫通妨抄」を書いているが、やけ
り自分の発見に執して、国語の歴史的事実^じに全然目をふさいでいる
のは惜しまれる。理屈なしに、狂歌をもって漫罵^ばを加えているところ
は、どこかに狭量な町学考氣質の一面を思わせる。

これに比較すると、高い識見^{しけん}、広い理解、まったく時流を抜いて
われわれを驚倒^{おどろか}させる人が田安宗武であった。

田安宗武という人が偉大な国学者であったことは、土岐善庵博士
によって明らかにされたが、その「玉函叢説」の一節（土岐善庵
田安宗武第三冊，21ページ，22ページ）に、

「それ仮字は、ことばを聞くがままに仮字書にして、また仮字書
のままだに読むぞ本なる。（中略）

げにいふがままに書かずば、何をもて転語を伝へんや。

粟を^あはと書けるも、古くは^あわといはで、^あはといひたる故^{ゆゑ}
也。今横にかよひて^あわといふをも本語の仮字なりとて猶^あはと
書く類^{たぐ}ひは、古意にかなはず。（中略）

^あわといふを^あわと書ける類ひを笑ふまじきなり。」

この終りの一行、明らかに現代新かなづかいの肯定論者である。

^あわと言うようになってからも^あはと書く類は「古意にかなはず」
と喝破^{かつ}した卓見、ことに「げにいふがままに書かずば何をもて転語

を伝へんや」——言語の歴史観をはっきりにぎっている人だったようである。

賀茂真淵翁を^{へい}聘して国学をたずねていたことそのことすでに大名として、えらい事であるが、土岐博士によればひとりの歌人としても、ひとりの学者としてもたいした人だった。真淵翁の歌が万葉振りになったのは途中からで、初めは古今調だった。真淵よりさきに宗武がすでに万葉調の歌をよんでいたので、むしろその影響だったということであるし、古事記の註については、真淵翁は、もう自分は年を取ってできないからと宣長にすすめたのであるが、宣長の古事記伝 40 巻の出る前、宗武にすでに古事記全巻の訓読ができていた。

宗武の国学は、まったくその天才に負うところのもので、格別だれの系統というものに拘束されなかったからであろう——あらゆる^{あがたい}県居門や^{すず}鈴の^や屋門下の意見に飛びはなれて、ひとり新かなづかいの肯定論をはいているわけである。真淵翁が、なぜここまで目を開いてこられなかったか。しかし、真淵翁門下には伝わり、加藤^{うまさ}美樹とその弟子の上田秋成が、宗武の意見を尊重して、「或御説」「或御説」と言って、引用しているのは注意を引く。

すなわち、秋成の「靈語通」があったゆえんであるが、宣長著の^か「呵刈葭」^{かい}の一喝^{かつ}に会って、ついに「或御説」も民間国学の間に芽を出さずにしまうのである。

ただし、徳川氏 300 年の間に、今ひとり、言語史観に目を止めた学者がある。^{はなわほき}塙保巳一^{いち}その人である。そのことは、門人の石原正明

近代語音韻図

*このほかにヤ行^{よう}拗音はア・ヤ・ワの3行
を除いて全部にア列・ウ列・オ列の3段
ずつ。ワ行拗音は、くわ・ぐわの2音だけ。

ア 行	あ a	い i	う u	え e	お o	
カ 行	か ka	き ki	く ku	け ke	こ ko	
ガ 行	語頭	が ga	ぎ gi	ぐ gu	げ ge	ご go
	語中語尾	が ɲa	ぎ ɲi	ぐ ɲu	げ ɲe	ご ɲo
サ 行	さ sa	し si	す su	せ se	そ so	
ザ 行	ざ za	じ ʒi	ず zu	ぜ ze	ぞ zo	
タ 行	た ta	ち tʃi	つ tsu	て te	と to	
ダ 行	語頭	だ da	ぢ dʒi	づ dzu	で de	ど do
	語中語尾	だ da	ぢ dʒi	づ dzu	で de	ど do
ナ 行	な na	に ni	ぬ nu	ね ne	の no	
ハ 行	語頭	は ha	ひ hi	ふ fu	へ he	ほ ho
	語中語尾	は wa	ひ i	ふ u	へ e	ほ o
バ 行	語頭	ば ba	び bi	ぶ bu	べ be	ぼ bo
	語中語尾	ば ba	び bi	ぶ bu	べ be	ぼ bo
パ 行	ぱ pa	ぴ pi	ぷ pu	ぺ pe	ぽ po	
マ 行	ま ma	み mi	む mu	め me	も mo	

分化し
はじめ
た。

ここは
同音に
帰しつ
つあつ
た。

ここは
同音に
帰した。

ヤ 行	や ya		ゆ yu		よ yo
ラ 行	ら ra	り ri	る ru	れ re	ろ ro
ワ 行	わ wa	ゐ i		ゑ e	を o

の「年々随筆」の次のような語でよくわかる。

「いゐ、えゑ、おをは、^{すで}既にまぎれ果(て)ての後、さる名家の
しいで給ひける事の跡なるに、やごとなきあたりに、みな用ひさ
せ給ふ事なれば、今これにしたがはむに、^{だれ}誰かは、まどへり、あ
やまれりといはん。かなづかひの事定まれるが如し。^{こそ}」

近き頃契沖云々ここにおいて、かなづかひ世に二流いできたり。

そのかみ、いゐ等の音わかれたりし世の古言をとくには、^{この}此か
なづかひによらざればおもひえがたし。たとへば、今がな、おとこ、
おとめと書(く)なれど、少男少女の義なれば、古がな、をと
こ、をとめなり。かかれば、学問に志ある人此かなも又廢しがた
し。

わが先生は、延喜より上たる書は古がなに、後なる書は、今が
なに、二様に書(き)て物せらる。此ごろより、いゐ等の音まが
ひてひとつになりし事なれば、此処分や公平ならん云々」

これによるに、石原正明は「古がな」・「今がな」と言って二様のか
なづかひを認め、古がなは古典を読むに欠くべからざる知識、今が
なは定家の定めたのがあるからそれに従って書いてよかろうと、当
用の実行かなづかひを別に認めているようである。そして、平安末

期から以後のは塙先生はいちいち古典かなづかいにあえて統一せず
に、そのままにして置かれたゆえんをめぐりょうにしている。これ
は塙先生のすぐれた識見である。そうせずに、みな古典かなづかい
に改めて、「群書類従」を編集されたら、中世の日本語の事情が埋没
して隠れてしまったことであろう。さいわいにもとのままに刊行さ
れたから、それによって中世の事情がそのままわれわれにたどられ
る。宗武のいわゆる、「転語」が明らかに伝えられたのである。

惜しいかな、こういう国語史的見解が、県居門・鈴屋門系統の人
々に欠如したために、その手になる江戸期の日本辞書に、一つも国
語史的見方を取り入れた編集がなかった——その後の明治の「語彙」
も「言海」も「日本大辞林」以下までも、日本には、ひとりのサム
エル＝ジョンソンもいなかったことがさびしい。ジョンソンの英語
辞典の近代英語のあのつづりが、今日の英語のつづりを決定してく
れた。日本では契沖が 1000 年前の古典のかなづかいを発見してく
れて以来、だれもだれも 1000 年前の古典かなづかいのみを永久不
変の唯一無二のほんとうのかなづかいと思い込んで、江戸時代でも
明治時代でも 1000 年前のかなづかいで書いて、それを当然として
いたのである。最近の音引き辞典が出るまで。

現代国語とかなづかい問題の興起

明治の維新は、王政復古とともに、諸事新たになったといっても、復古的な空気が底流をなして、改まるべくして、改まらずにやんだことが数々あった。その一つに国語教育の根本義があった。

江戸時代に、学問奨励といつてまず起ったのは漢学で、学問といつたらまず漢字を学ぶことだった。したがって男女7才で学校にあって、まず学ぶのは漢字だったし、古典かなづかいだったから、明治の学校も、いくらも江戸時代と変らなかつた。それは、明治の新教育にあたつたのは、漢学者・国学者であり、漢学者は、自分のまず知らなければならないのが漢字だから、庶民の教育にも漢字をまず知らしめようとするし、国学者が、何よりもまず知らなければならないのは、古典かなづかいであつたから、自分たちのまず知らなければならないことを、そのまま学童にも、まず知らなければならないものとしたのであつた。

ほんとうの「言語活動の教育」などは、てんで問題にされなかつたのである。

それだから、現代の人々も、漢字は5000~6000ないし1000近くも学ぶことであつたろうし、漢字を駆使することは、学識あるものの標識となつてき、中国でさえも、「古文です」と言つて大学生が

敬遠するほどの古い四書五經の字句を、一点一画やかましく説いて、その知識を誇るから、学生も、そんな一点一画、活字体と寸分たがわないように書かなければ誤りとされるというほとんど狂気じみた学習に精根を尽した。

純国語のつづりも、イギリスならアングロサクソン語にもあたる100年前のつづりを、7才の学童につづらせて、「蝶々」は「てふてふ」，「今日」は「けふ」，「酔う」は「ゑふ」，「倒る」は「たふる」，「仰ぐ」は「あふぐ」と覚え書かなければならぬようになっていた。

これだから、国語教育は、10年・15年に及んでもなかなかじゅうぶんではなかった。大学を卒業しても、自国語の手紙1本書くの_に，辞書を引かなければならなかった。それでも誤りのない手紙を書きおろすこと容易でなかったのである。それでも、国民は、こういうものと思って怪しまず、不平もなく、むずかしい国語教育に半生を浪費していたのである。

これがそもそも、明治初年の国字問題興起の原因である。

国字問題の発端は、実は明治よりも、も少しさかのぼる。そして不思議にもそのことがやはり米国人の示唆によるものがあつた。すなわち、ペリー提督が浦賀にやってきたときに、その通事を務めたS・ウィリアム（1812—82）という米人宣教師があつた。後に枢密院顧問官になる前島密氏が、この人の談に「句法語格の整然たる国語の有るにも^{これ}之^おを措き、簡易^{べんしやう}便捷なる^{かな}仮名字のあるにも之を専用せず、^か彼の繁雑不便、字内無二なる漢字を用い、句法語格の不自由な

る難解多謬の漢字に^よ拠り普通教育をなすが如し。此の活潑なる知力を有する日本人にして、此の貧弱の在^{ありさま}様に屈し居るは、全く支那字の頑毒^{がん}に深く感染して其の精神を麻痺^{まひ}せるなり」と断言するのを聞いて考えしめられたのがもとだといわれる。かくて慶応2年、「国字改良の議」を15代将軍に奉ったが、もちろん、当時のこととて顧みられず、王政維新となり、明治2年、さらに、遠州中泉の地から、「国文教育之儀に付建議」「国文教育施行の方法」および「廢漢字私見書」の3編を集議院に提出し、漢字を廢してひらがなを国字とし、もって教育の普及を図らんことを切言し、教育制度改革の必要、ならびにその方法を論じ、これが施行の期を6期にわかし、8年間にて教育の基礎を建つべしとしたその論策は、精密をきわめたものだったという。明治2年は小学校令の敷かれた年で、時を得た建言であったが、当路の大官や大学総監も、この新しい意見に理解を欠き、あまつさえ、狂人あしらいされて、顧みられずに終った。

しかし、前島の堅き信念は、明治5年、時の文部大臣大木喬任伯・右大臣岩倉具視公に説き「学制御施行に先だち、国字改良相成度卑見内申書」を奉り、なお政府にも建言しようとして「興国文廢漢字議」を草したが、やはり顧みられなかった。

10年を経た、明治16、7年の交は、欧化主義の徹するところ、久しい中国文化崇拝の夢も破れて、ようやく漢字から国語を解放すべしという声が、大学の中からもあがってきた。外山正一博士の「漢字破」その他。また、これもアメリカの言語学者 W=D=ホ

イトー (W.D. Whitney) の示唆に基いて、ローマ字国字論が盛んに起る。国粹派から「かなのとも」「かなのくわい」などが起って、これに対立したのは16, 7年の交であった。

また10年を経て27, 8年、日清戦争が、ふたたび、廃漢字論を誘発して、井上哲次郎博士・上田万年博士の新国字論の唱導があり、さらに明治33年から、外人の内地雑居になるという声が呼びかけとなって、3度、国字・国語問題がやかましくなり、上田万年博士の「内地雑居後に於ける語学問題」の評論がある。これによれば、イギリスの語学者グラッドストン氏は、イタリア・ドイツ・イギリス3か国における児童の、6, 7才から始めて、何時間を読書科に課せば、普通の書を読みうるかを計算・対照しているのに、

イタリア	945 時間
------	--------

ドイツ	1,302 時間
-----	----------

イギリス	2,320 時間
------	----------

1年360時間の割にして、入学後、早くも2,3年、おそくも4,5年の後には、これら諸国の児童は普通の書を読みうる。これをわが国の20年もかかるのと比較してその差いかんと嘆いた。

政府でも考えるところがあり、明治33年国語調査会というものゝが文部省にでき、上田万年博士が会長として建議するところあり、かなづかいのうち、最大の困難となっている字音かなづかいについて、発音的に区別のなくなったのを区別せずに、一つに統一し、長音はすべて棒で示す案を立てて、まず小学校の読本の上にこれを実行し

た。

「かう」「こう」「かふ」「こふ」をすべて「コー」に、「きょう」「きゅう」「けう」「けふ」をすべて「キョー」に、「さう」「そう」「さふ」「そふ」をすべて「ソー」に、「しょう」「しゅう」「せう」「せふ」をすべて「ショー」に統一する類である。これが明治38年小学教育に断行され教育界に非常に歓迎されたいわゆる33年式の棒引きかなづかいである。漸を追うて、純国語にも及ぼすつもりであったろうが、そこまでまだ行かないうちに、憲政会内閣の時、貴族院にあがった反対説が、政治問題にひっかかってついに議会の動かすに至り、すべて元どおりということになって、明治41年この新かなづかい案は、動天返しになってしまった。次いで大正2年国語調査委員会官制廃止となってしまう。

その後やはり国語問題の重要性にかんがみ、臨時国語調査会ができて、再三漢字の節減案とかなづかい改訂案を立案して実現を期したが、そのたびに在野に反対の声が起っては、そのままにやんだ。

昭和12年12月、臨時国語調査会に代った国語審議会が、17年3月標準漢字表を発表する。常用漢字1,112字（後に、1,134字）準常用漢字1,346字（後に1,320字）特別漢字71字（後に74字）、合計2,529字（後に2,528字）である。7月には「字音かなづかい整理案」を決定したが、当時戦争たけなわに、保守的傾向の人々が起ってこれに反対し、国語・国文学者その他を含めた日本国語会を起して反対の氣勢をあげる。しかし初めの意気込みほどもなく振わずに終り、字音かなづかいのほうなら、余儀なかろうとその首唱者

が自白した。しかし、緒戦のはなやかだったころは、伝統重んずべしという声盛んに、国民のよく困難に打ち勝つ力も、幼い時から、むずかしい漢字を学び、むずかしいつづりと取っ組んで成長するうちに知らず知らず養われていて、それで今日の大勝をうることができたのだとまで考えるものがあつた。それゆえ、国字・国語の問題は、戦争中は火の消えたよう、まさに暗黒時代ともいうべき時期を経過していた。

現代かなづかい案の公布

いまだかつてない敗戦下に、3度アメリカに国語反省の機会を与えられた。教育使節団が来てみて、農村や工場の青年たちの、新聞の政治面を読むことができないのを実地検討して、これでは、いつ民主日本ができあがるかと言って、いわゆる言語改革の勧告をつきつけられることになったからである。

こうして、国字・国語問題は、終戦の秋からただちに始まった。この年の元日の詔は、前例を破ったやさしい用語で発せられたのがまずその第一声とも見られるものだった。

次いでこの4月、山本有三氏の提唱になる「国民の国語運動連盟」ができた。その月にアメリカ教育使節団のマ元帥への報告、言語改革とローマ字採用との提案が発表されて、国字・国語問題百年の懸

現代語音韻図

*このほかにヤ行拗音^{よう}がア列・ウ列・オ列に
あり、ワ行拗音くわ・ぐわは音韻としては
無くなる。

ア 行		あ a	い i	う u	え e	お o
カ 行		か ka	き ki	く ku	け ke	こ ko
ガ 行	語頭	が ga	ぎ gi	ぐ gu	げ ge	ご go
	語中語尾	が ga	ぎ gi	ぐ gu	げ ge	ご go
サ 行		さ sa	し shi	す su	せ se	そ so
ザ 行		ざ za	じ ji	ず zu	ぜ ze	ぞ zo
タ 行		た ta	ち chi	つ tsu	て te	と to
ダ 行	語頭	だ da	ぢ dji	づ dzu	で de	ど do
	語中語尾	だ da	ぢ dji	づ dzu	で de	ど do
ナ 行		な na	に ni	ぬ nu	ね ne	の no
ハ 行	語頭	は ha	ひ hi	ふ hu	へ he	ほ ho
	語中語尾	は wa	ひ i	ふ u	へ e	ほ o
バ 行	語頭	ば ba	び bi	ぶ bu	べ be	ぼ bo
	語中語尾	ば ba	び bi	ぶ bu	べ be	ぼ bo
パ 行		ぱ pa	ぴ pi	ぷ pu	ぺ pe	ぽ po
マ 行		ま ma	み mi	む mu	め me	も mo

ここがはっきり分
化した。

ここは同
音に歸し
た。

ここは同
音に歸し
た。

ヤ 行	や ya		ゆ yu		よ yo
ラ 行	ら ra	り ri	る ru	れ re	ろ ro
ワ 行	わ wa	ゐ i		ゑ e	を o

案解決の機会が熟した。こうして、今回の当用漢字の選定と新かなづかいの創始となった。

今回の新かなづかいは、かねて国語審議会が、かなづかい主査委員会を設けて審議してきたところの案で、21年9月の総会にかけて、決定し、11月16日に、内閣訓令第8号、内閣告示第30号で、「現代かなづかい」として公布されたものである。その全文は次のとおりのものである。

ま え が き

- 一 このかなづかいは、大体现代語音にもとづいて、現代語をかなで書きあらわす場合の準則を示したものである。
- 一 このかなづかいは、主として現代文のうち口語体のものに適用する。
- 一 原文のかなづかいによる必要のあるもの、またはこれを変更しがたいものは除く。

原 則

第1類

1. 旧かなづかいのゐ, ゑ, をは今後い, え, おと書く。ただし「本を読む」などの助詞「を」はもとのままとする。
2. 旧かなづかいのくわ, ぐわは今後か, がと書く。
5. 旧かなづかいのぢ, づは今後じ, ずと書く。ただし, 2語の連合によって生じたぢ, づ, たとえば, はなぢ(鼻血)みかづき(三日月)の類, 同音の連呼によって生じたぢ, づ, たとえば, ちぢむ(縮む)つづく(続く)の類はもとのままとする。
4. ワ, イ, ウ, エ, オに発音される旧かなづかいのは, ひ, ふ, へ, ほは今後わ, い, う, え, おと書く。ただし「わたくしは京都へ行く」などの助詞「は」「へ」はもとのまま「は」「へ」と書くことを本則とする。
5. オに発音されるふは今後おと書く。
注意「クワ・カ」「グワ・ガ」, および「ジ・ズ」の区別をいい分けている地方に限り, これを書き分けてもさしつかえない。

第2類

1. ユの長音はゆうと書く。
2. エ列長音は, エ列のかなにえをつけて書く。
3. オ列長音は, 「おう」「こう」「そう」「とう」のように, オ列のかなにうをつけて書くことを本則とする。

第3類

ウ列拗音の長音は「きゅう」「しゅう」「ちゅう」「にゅう」の

ように、ウ列拗音のかなにうをつけて書く。

第4類

オ列拗音の長音は、「きょう」「しょう」「ちょう」「にょう」のように、オ列拗音のかなにうをつけて書くことを本則とする。

現代かなづかいの精神

今回の新かなづかいは、以上のとおりのものであって、要するに、わくをはずして、らくにすることを眼目とするから、もし、誤解して、新しい今一つのわくをはめるもののようにならずかしく思いひがめたら、それはまったく慮外な不幸である。

33 年式とちがう点は、引き声（長音）を棒引きにすることを今回は避けた点である。棒引きが前回不評であって、動天返しになる原因ともなったものであるので、今回は、棒の代りに、そこをば、オ列のときでもうで書くことにしたのは、うは、長く引く印のように思われていて、目に抵抗が少なく、これなら付いてこられそうに思われるからである。そういうように、現代かなづかいは、「表音的かなづかい」ではないのである。

なお逐条、意のあるところを注して行ってみよう。

まず、まえがきに、「このかなづかいは、現代語音にもとづく」

と触れた意味は、こうである。旧かなづかいは、平安朝の語音に基いたものであるが、この現代かなづかいは、現代語音に基くものだというのであって、語音といったのは、音韻というにひとしい。

国語調査会時代の言い分では、旧かなづかいを歴史的かなづかい、新かなづかいをば表音かなづかいと呼んだ。そのころはこの表音的ということを盛んに唱導したものであるが、今日は、音声と音韻とを区別し、音標文字は音韻を表記するものではあるが、音声は音盤などでなければ書くことができない現象であるとする。表音的ということが、もし発音どほりを書く意味だとすると、それは、せいぜい表音記号であっても、必ずしも正字法（＝かなづかい）ではない。（そう言って、橋本進吉博士のごとき、「表音式かなづかいは、かなづかいにあらず」と道破したほどである。）だから今度は、どこにも、新かなづかいを表音的かなづかいとは呼んでいないのである。ただ基礎を、現代語音におくという点を明らかにしただけである。しかし、その点が重要な点である。従来唯一の正しいかなづかいと思って守っていた旧かなづかいは 1000 年も前の語音に基いたものだから、そうではなくって、現代の言語生活のよるところは、現代語音だと言いつたのである。

こう言いつえて、発音どおりにしたと言わないのは、あとに行つてたとえば撥音（はねおん）はあるときは m あるときは n また りにそれぞれひびくが、いつもんで統一して書くのは、発音に従わず、当代人がそれを一つのものだと考えているその事実に基くから、そ

れでいいのである。促音も、あとに来る音しだいで、p・k・t・s・
 ʃ 等々にひびくけれども、邦人の音韻観念ではみな「つまる」音だ
 と考えて一つの音に思っているから、それに従ってツで統一して書
 くゆえんである。正字法は、発音記号ではないからそれでよろしい
 という立場であるのに、世間では、まだ明治時代のように、表音式
 かなづかいであるもののように考え非難しているむきがあるが、こ
 れは当局の進歩に反して非難側の旧態依然たるものである。

まえがきの二に、「このかなづかいは、現代文のうち、口語体のも
 のに適用する」という意味は、古文はそのままにしておくので、決し
 て、古文までも、このかなづかいで書き改めるということはしない
 ということと、いま一つには、現代文も、全部ではなしに、口語文
 だけをこのかなづかいにするという意味である。たとえば現代人の
 作る短歌や俳句や文語体の文章などがあっても、そこまでは及ばな
 い、実用的な口語文の言語活動だけのことだという意味である。

現代人でも、時にあるいは文語体の文を書きつづる人がある。現
 代人の作でも、文語体はこのかなづかいの適用を受けない。そこま
 ではわかるが、では口語で書く口語詩はどうか。非実用的な、芸術
 の畠までは、新かなづかいは追いかけて行く必要もありはしないけ
 れども、こどもの作る童謡などだったら当然新かなづかいで行くで
 あろう。ではその境がわからなくなる。それだからであろう、作家
 の側から、口語詩を新かなづかいで作っているのを見かけるし、文
 部省の教科書でもそういうのが見えたから、今では一般に、詩歌の

ような芸術的作品でも、口語体のものであったらこの適用を受けるものとしてあるらしい。

まだそこまではよい。鷗外・漱石^{おう せう}というような大家の作を、口語だからといって教科書などに、新かなづかいに直して出すということは、どういうことであろう。現代文にだけ新かなづかいが適用されて、古文へはさかのぼらずというたてまえが、ここに至って動揺する。鷗外・漱石の文を古文と見れば、触れないほうがよいし、それも口語文だとすれば、適用を受けるかと解されてくる。

新かなづかい創始の精神は、新しい時代の国語生活改善の目的であって、古典をどうしようというのではない。古典は古典としてそのまま鑑賞されるべきものである。

ただ、教育者として、同じ口語体が、新旧2様の書きかたでは、教えるのに困るというかもしれない。昔は、こう書いたのだと、説明してわかりうる程度にとどめること、文語の文章に対して、昔はこう活用したのだと、わかりうる程度に説明しておくのと同じことでよいと思う。

とにかく、新かなづかいは、明日の国語のためであって、古典へ指一本さすつもりのないものであることをまえがきの二が明示したものであることをことわっておく。

まえがきの三は、「原文のかなづかいによる必要のあるもの、または変更しがたいものは除く」とことわっている。これは、自分で書く場合のかなづかいではなく、たとえば、固有名詞の場合とか、

学術的に厳密に引用する必要のある場合等の規定と見るべきものである。すでに古典と見ることも可能である明治の文学を、現代文学と見て、そして1字の改ざんも許さない名文としてそのままのかなづかいにしておくときの理由となるのは、この条文であろう。

第 1 類

1 は、ワ行音が中世以後ア行と混じてきた古い歴史をもつから、もう区別せずに書き下してよかろうとしたもので、ゐる（居）ゐど（井戸）ゐのしし（猪）ゐぐさ（蘭）の類を、いる・いど・いのしし・いぐさと書く類を認め、ゑ（絵）、すゑ（末）、ゆゑ（故）、植ゑなどを、え・すえ・ゆえ・植えと書く類を許し、を（尾・緒）、をとこ（男）、をんな（女）の類を、お・おとこ・おんなと書く類（これなどは中世500年ころ書いてきた歴史がある）をもう認めてよろしいとしたもの。

ただし、そこに、「本を読む」のををば、をと書く例外をことわっている。これが問題である。なぜこんな例外を許したか。例外にせずに、これをも「お」と書いたらよいではないか、という非難がどうだろうと聞える。これには、こういう理由がある――

もちろん例外は、よくよくでないかぎりには設けないほうがよい。委員会でもそれは皆心得ていたことなのである。だから、この例外を設けたのは、よくよくのことなのである。

およそ改革は、ことに万人の所有である言語の改革は、まさつの少ない、万人のすぐついてこられるようなものでなければ、案がい

かにりっぱでも、机上の理想論に終って、実現ができない。理想としては、だれもだれも助詞のををもおにしてみたい。しかし、助詞というもの、ことに「が」「の」「に」「を」「へ」「は」などは、最もたくさん出てくる。そのうちさいわいにして、「が」「の」「に」は、かなづかいに關係がないからよいが、これらにも増してひんぱんに出る「は」「を」「へ」を現代音によると言つて、いちいち

これわ、それわ、わたくしわ

それお、これお、わたくしお

ここえ、そこえ、わたくしえ

というように書くことになる、あまりにも、今までと変りすぎて異様さが目だち、ちょっと実行の手がにぶる。この助詞さえ、もし今までどおりにして置いてよかったら、他の点は、漢字で書くとほとんど隠れて、新かなづかいも、大部分今までどおりで済むから、明日からでも、すぐ新聞を新かなづかいで出せようが、助詞だけは漢字では書けず、いつもかなであつて、必ずひっかかる、いちいち直すにかかる手もうるさいが、見る目にも抵抗が多過ぎて、すぐ実行できるか、あやぶまれる。これが、大新聞社側の決定的な意見であつたし、そればかりではなく、その昔動天返しになつた 33 年案のところ、1,2 の人のいわゆる表音かなづかいで発表される論文を見た記憶に、いかにも、「わ」「お」「え」が、目にたつて、一見異様であつて親しめなかつた記憶が、ある委員たちにもあつたのである。

大事の前の小事である。実行できない案では、いかに美しくつて

もなんにもならない。要は実行できる案でなければ、一時強行されても、少しでも無理があると、動天返しになる憂いがある。

そこで委員会も、助詞を元どおりにのこすという妥協案を決定するよりほかにしかたがなかったようである。

だがそのために、大新聞がただちに実行に移し、地方新聞それに追隨し、諸雑誌も相つづいてこれにならうという實現的効果を奏することができたのである。

「を」を「を」でがまんするようになった痛いところは、そういうわけでできたのである。

それならば、第1条のを、を、ををい・え・おに書くという条文に従って、助詞おと書くことをも許容することにしたらよかったではないか。なぜならおとなの目には抵抗があってもこどもにはそれがないから、口に合わせて平気で「お」と書くに違いない。それを罰点にせず済む。それををと書かなくては誤りだとして、罰点をつけることはいかにも残酷である。むしろ、をと書くほうを、許容にしておけば、こどもも助かり、新聞社をはじめ、おとなたちも助かり、両助かりであるとわれわれは主張したが、「許容案」では行きたくない、本則に従って行きたいから、をと書くほうを本則とすべきだと主張されるのにひきずられた形である。

思うに、新かなづかい案も、もとより永遠の鉄則ではない。漸を追って進化すべき性質のものである。もしさきへ行って1歩の前進が許される日があったら、せめてこどもたちを救うために、せいぜ

い「助詞のをもおと書いてもよい」ということをはっきり出してよいのではあるまいか。

2 「旧かなづかいのくわ・ぐわは今後か・がと書く」

これは、東京では、唇音退化の一般原則どおり、この w 音が落ちて、か・がとしか発音されないのみか、進んで、これをくちびるにかけて発音するのを聞くと、いかにもいなかじみて聞えて少しも美しくひびかないようになり、くちびるをはずして、ka, ga というほうが、すっきりして聞えるようになったから、現代標準発音としては、とうてい今から kwa, gwa に復旧することができない。それで思い切って、か・がのほうに書くことに決定したのである。こうすることにより、火事と家事、菓子と河岸^{かし}、会と貝と同じかなづかいになって混同してくる恐れがあるが、前後の関係から理解させることになってしまった。西南地方や新潟・秋田・青森地方等には、これらがまだ発音し分けられているので、それらの地方のことは書き分ける必要のあるときには書き分けても、中央標準語を書くときには書き分けることを要しないわけである。

3 「旧かなづかいのぢ・づは今後じ・ずと書く」というのは、すでに 300 年来、じ (zi) の音が少なくとも語頭には、舌が上に触れて dgi に発音され、ぢは、d から i へ移る間へ、わたりの る がはいって dgi となり、じ・ぢ無差別になってきたから、書き分けることなく、いずれをも じ で書くことにしたものであり、同様に、ずは舌が上に触れて d が加わり、づは、z がはいって、けっきょくどち

らも dzu になって区別がなくなったから、いずれをもずで書いて統一することにしたものである。

ただし、月（つき）が、^みか^づき となるとき、みかずきと書いては、同一語の月が、両様に書かれるという矛盾が生じ、「ずき」では、とうてい、月を理解することができない。それゆえ2語連なって濁音になったときは、元のかなの濁音にするのでなければ承知ができないというのも、委員中、実行家側の人の主張であった。同様に、血がちでありながら、鼻血となって連濁を生じたときに、「はなじ」ではいかにもちのことと解しがたく「はなぢ」でなければ承知できないということであった。

これと似た関係が、明らかに同音の反復で、連濁となったものである「つづく」「ちぢみ」の類も、づ・ぢを保存して置かなければ、他の語のようになってしまって、「つづく」「ちぢみ」を連想しがたくなるから、やはり、同音の連呼によって生じたぢ・づはそのままぢ・づと書くことにした。

世間には、これらの例外を設けずに、やはり一様にじ・ずと書くべきだと主張する声がある。道理である。そこまで行くべきであるが、漸進主義を取って、しばらく妥協したものである。

4 「旧かなのは・ひ・ふ・へ・ほのワ・イ・ウ・エ・オと発音されるものは、わ・い・う・え・おと書く」

これは語中・語尾のハ行音が、平安の末に、有声化して、みなワ行に発音されるもののことであるが、当然のことであるのに、世間

あるいはこれをとがめて、それでは、歴史的かなづかいを知らなければ、今度のかなづかいを理解することできないではないかと抗議する。

これはたいへんな誤解である。こどもへかなづかいを教えるのには、どういうのは、どのかななどということ無しに、ただ1語1語を、こうつづると教えればよいのであって、少しも歴史的かなづかいを教える必要がない。「旧かなで、は・ひ・ふ・へ・ほと書いてワイ・ウ・エ・オと発音する語は……」というのは、委員会で、評議にかけた文句である。こう言うことによって、一瞬にして、どういう語のことか、一般人および専門家に思いあたらせるために言う語である。教え子にそう言って教えろとは、どこにも言っていない。教え子には1語1語具体的につづりを教えるから何年もかかる、それが国語教育なのである。たとへば、英語の学習だって one, two, three, four, five, six, seven, eight, nine, ten の1語1語を学ぶときに、1語1語具体的にワンは one, ツーは two、スリーは three と教えるだけで、理屈なしなのである。それと同様に、顔はかおである、頬はほおである、川はかわである、沢はさわであるというように教えるのである。

新かなづかいのすべての条文はみな、そう言って教え子を導けというつもりではなく単に5分か10分間に、こんどの方針を旧かなを知る人々に理解させるための概括なのである。

5 「オと発音されるふはおと書く」

これは語中・語尾のふについていう。語中・語尾のふはウとなるのが合法的（「合ふ」がアウ，「舞ふ」がマウ，近江はアウミ，河内はカウチ）なのに，少しばかりの例が，オと発音される — あふひ（葵）のアオイ，たふるのタオル，あふぐ（仰）のアオグの類。それでこれを，おと書くことを付加したわけである。

注意に書き添えた2か条はこの区別を保存する地方音のほうで、元の発音なのであるが、標準語には区別が無いゆえ、今後これは区別しなくてもよいと決定したことを書き添えたのである。

その1は、クワ (kwa) とカ (ka), グワ (gwa) とガ (ga) の区別である。これは、西南地方と北国越後から海岸沿ひの秋田県・青森県方面などの発音には今でもはっきり区別があるから、はっきり区別のある地方に向かって、区別をするなということのほうが無理ゆえ、その区別のある地方では書き分けてもさしつかえが無いことを注意したのは当然の決定である。

その2は、ジ・ヂの区別のある地方とは、九州の大部分と土佐および紀伊の地方などのことである。ジを [ʒi], ヂを [dʒi] と発音する類である。[zi]・[di] の別だったはずであるが、今日そう発音し分けているところはないが、ジのほうにd がはいらず、ヂのほうにd のあとへるがはいったけれど、まだまったく混同するまでには至っていない。土佐など、富士は [Fuzi] [藤は] [Fudʒi] 次郎は [ʒirô] 治郎は [dʒirô] とははっきり区別する。九州では、薩摩・大隅・日向・熊本および肥前でも佐賀市にはもう区別なくなった

が、郡部には区別がある。それもだんだん若い世代には失われつつある。しかし、とにかく区別がある所では、はっきり区別を意識していて、区別のあることを自負してさえいるから、これらの地方に対し、標準語なみに混同しろということは無理であるから、区別をして書き分けていることを認容したのである。

第2類

これは、長音を書き表わす方法についての規定である。長音は33年式では、棒引きで表わしたのであるが、41年の貴族院において、森鷗外おうが起って棒引きかなづかいに反対をして、いったいこの棒は、文字であるか。文字ならなんという字であるか、と追究して当局をあわてさせ、ついに全部の案をくつがえされた苦い経験があるため、今回はその失敗をくり返さないように苦心をして、棒引きの代りにうやいを書くことに決定したものである。

ここは、そういう因縁のある点で、実際の現代音とは合わない方法を取っている。そのためにまた一部の非難の的となっている点である。

時代は進んだことであり、今回こそあるいは棒引きけっこうかもしれないなかった、というのは、当局にもすでにじゅうぶんな研究もあり、この棒はもと「引」という字の左半分を省略してできたものであって、もっと古くは

阿 引

のごとく、引という全画で引く音を注したのである。礼の徧を省略

したレの字などと同じ方法で正式な由来をもつ助字などであって、りっぱに存在の資格をもつものであり、今回も外来語の表記には認めているのである。外来語の表記には江戸時代から用いられて目に慣れているから文句はない。純国語には、ことに美的な表記の際には打ちこわしになる感があって、ぞっとしないところから、排斥されるのもあろう。しかし、それらは目慣れさえすれば解決される問題であり、アー・イー・ウー・エー・オー至って簡単に、直上の音を引くことを表わし得て便利なもので、これなら、ウで書く方法のような非難は避けえたことであつたろう。

国語には、1単語の「あ」や「お」に終る語がなかったゆえにこおこお（孝行）、かこお（書こう）、とろお（取ろう）など書くと、目に抵抗が多い。同じ母音の中でも、狭い母音なら、あとにきて連母音をなしても、そう苦しまずに発音できたために、漢字音を取り込んだ際、盛んにアウ・カウ・サウ・シャウ・ショウ・タウ・チャウ・チョウの類、アイ・タイ・エイ・ケイ・セイ・テイ・メイの類に発音して取り込んだ。この連母音を口慣れるにつれて、純国語の上にまでこの発音が、どしどし現れてきたのが例のウ音便（ちかう・ふかう・こう・さう・よう・美しう・うれしうの類）、イ音便（咲いて・吹いて・明いて・きさいの宮・さいはひ・すいがい・かうがい・むかひの岡の類）であつた。こうしてウおよびイならば、母音でも下につく語がたくさん生じ、発音が変化して、長音化しても、書くには依然としてウおよびイが書かれてきたから、大衆には

ウやイは長く引くときに書く文字のような感をいだかせさえもした。

そこだから今回、棒引きの代りに、このウとイとをもってして、美観の上からくる反対論をもおさえ、目の抵抗からくる非難をも避けて、とにかく、この新かなづかいを実現することに成功したのである。すなわち――

1 ュの長音は、ゆうと書く。これは音にも合うから論がない。

2 エ列長音は、エ列のかなにえをつけて書く。これは、ねえさん・これがねえ・ええそうです、の類である。帝・明・慶・兵・榮・礼・寧の類はえをつけて発音するときは、今なおテイ・メイ・ケイ・ヘイ・エイ・レイ・ネイのようになるから、そのままイを添えて書くことを認めているから、このえには触れていない。

3 オ列長音は、うを添えて書くので、ここで発音に合わないとは非難を受けるところである孝行をこうこう、学校をがっこう、校長をこうちょう、町長をちょうちょう、情調をじょうちょう、少将をしょうしょうの類に書くのである。発音どおりではないじゃないかという非難に対しては、どこの国の正字法にも、発音と合わない部分がある。正字法は、発音記号ではないからと答えておくであらう。

第3類

ウ列拗音の長音は、うを添えること。これは、音に合うことで少しのふつどうもない。ただし、このウ列長音という中には

きゅうり（生瓜）

うれしゅう（嬉しう）、よろしゅう（宜しう）、うつくしゅう
（美しう）

の類をもいうのである。実はその点に少し問題がある。

ゆども、ゆうともいう「油」などは「ゆう」であろうし、しゆとも
しゅうともいう「衆」などは「しゅう」であろう。

それと、東京発音では、「宜しう」「嬉しう」「美しう」のしうも
同じかはしらないが、それは音声学的に同じであっても、音韻とし
ては、シウである。孝行を「こうこう」と書くほどだったら、「宜
しう」「美しう」「嬉しう」は、やはり、「しゅう」でなく「しう」で行
くほうが適当にも考えられる。1字少ないだけでも、見た目にも、
書くのにも、活字を拾う上でも助かることであろうが、この点、新
聞のほうに別に抗議なく、若い委員たちは少しでも発音に近いほう
を好むので、本条のように定まったように記憶する。

第4類

オ列拗音の場合、これは、きょう・ちょう・しょう等のように、
やはり音に合わないが、長い歴史があるによって、うを書いて表わ
すこととしたのである。

きょうは3字になるから、けうにしたいという声があり、蝶々な
ども、てうてうぐらいだったら、古語への連絡もすぐついて、便利
であるが、これは、きゅう・しゅう・ちゅう を、きう・しう・ち
うで行くことよりもいっそうむずかしいこととなりたたなかつ、

たようである。

この拗音を表わす「よ」や、促音を表わす「つ」はなるべく右側へ小さく書くことが好ましいことである。毎日の新聞紙などには早急には実行されないが、それでも徐々には実行の機運に向かいつつあることが感じられる。

現代かなづかいの要約

新かなの精神は、わくをはずすことにあるのであるから、一つのわくをはずした代りに今一つの新しいわくをかけるようなことは、決して本意ではない。

旧かなは、1000年以前の口に合わせてものなのに、新かなは、今の人の口に合わせてるのであるから、なんといっても、今の人には、新かなのほうが、らくなのである。

それを、旧かなを覚えている人々は、その上に新かなを知らなければならなくなったのを、やっかい視していやがるが、要約すると左のような、簡単なことなのである。

第1類

○ゐ・ゑ・を→イ・エ・オ

○語中・語尾のは・ひ・ふ・へ・ほ→ワ・イ・ウ・エ・オ

〔ただし、助詞の「は」「を」「へ」だけは元のまま〕

○語中・語尾のふでオと発音されるものが少々ある。――→オ

^{あふひ}葵――アオイ，^{あふ}仰ぐ――アオグ，^{たふ}倒す――タオス

そのほかは「くわ」は「か」でよい，「ぢ」「づ」は，ジ・ズでよい。

そこにただし書がある。後に言及する。

第2類（長音の書き方）

○ウ列音の長音には，うをつける。

○エ列音の長音には，えをつける。

○オ列音の長音には，うをつける。

第3類（拗長音の書き方）

○しゅう この「ゆ」はなるべくは右側へ小書する。

○しょう この「よ」もなるべく右側へ小書する。

なお，促音のつもなるべく右側へ小書する。

たった，これだけのことである。ただし例外が1，2ある。それを次に――

例外1 三日月のとき月は，みかすきでは他語のようになつてま
ずい。かように明らかに他語と熟語になつて濁ったときは，原音の
濁音にしておく。

同様の例は，かなづかい・心づよい・もとづく・縁づく・気づいた・
手づくり・こどもづれの類。鼻^ぢ血・もらいちぢ・ぢゃのみぢゃわ
んの類。

同音連呼で濁る語も同じ。例 つづく・ちぢむの類。

次のような語は，明らかに2語の熟合語とわからないほど古くて

きた語ゆえ，1語とみなす。うなずく。

例外2 「大きい」などを「おおきい」と書く。これは，実は例外というべきものではなくて，その「おお」は「お」が二つ続いた音と見てそう書くことになったのである。（長音とみたのなら，当然「おう」と書くべきところである。）

が，さてこれを実際に書いてみると，長音の「おう」と分けて考えることが一般にはむずかしいという批評がある。そこでこの二つを統一するように改定を希望する声もあるが，現在のところでは，これらはある限られた少数の語にとどまるから，それをあげて教授するように注意するよりほかはない。たとえば――

おおきい(大) おおい(多) とおい(遠) こおり(氷) とおり

(通) もよおし(催) おおせ(仰) おおやけ(公) おおむね(概)

などである。

なお，多・遠の類を「おう」「とう」と書いてしまつては，「どうぞ」「遠うございます」のときのかなが，

おううございます

とううございます

となつて読めない。ゆえに，第1類4によってオと発音するほはおと書くの条文に従つて，

おおうございます

とおうございます

と書くほうがまざっているのである。

ここに問題となるのは、逢坂は、あふさか——あうさか——オオさかとなったとすると、そのオオの部分で、おおと書くべきかおうと書くべきかである。

文字について記述的にいえば、あふのおもオになり、ふもオになったから、「オと発音するふはおと書く」に従って、おおさかでもよろしい。しかし音変化の歴史についていえば、「あふ」が平安朝末からアウという音になっていたはず、そのアウが、中世を通じて依然としてアウで、足利末から江戸の初頭にかけて、アウのアもオになりウもオになったのは相互同化によるものである。すると、おうさかでもよろしい。しかし、こういう語原にさかのぼってまで、今日同音の大阪・逢坂を書き分けるべきものか、どうか。わくをはずしてやる代りに、新しいわくをはめてやるという矛盾になる。こどもたちにとってこんな負担を負わすべきものか、どうか。そしてこどもが逢坂をもおおさかと書いたら、誤りとすべきか、どうか。同じ誤りでも、おおさかをおうさかと誤るよりは、おうさかをおおさかと誤るほうは、よろしいのではあるまいか。前途はそのほうへ行くべきであるから。

も一つ問題がある。遠江の国名、とほつ・あはうみの国が、とほたふみとなったものである。今はトートーミであるけれど、上のトーはとおであって、下のトーはとうだということになるだろうか。トートーミを、こどもにわざわざとおとうみと強制的に覚えさせることがはたしてどれほど効果あることなのか。もし同じくまちがうな

らば、とおとおみとまちがうほうがよろしいまちがいではないであろうか。われわれは、とおとおみと書いたこどもは罰点をやるに忍びないものである。

「お」というところに「う」と書くほうは、まだ古いところに引かれて書く書き方であるから、こどもたち、何の古いところになすむことがないものには、まっすぐに、「お」の発音は「お」を書いて行くのであって、これに罰点をつけるべきではあるまいと信ずるものである。いずれ両方行われて、時がこれを解決するとしたら、「お」の音は「お」を書くほうが残ることが明らかである。

結 論

矢はすでに弓づるを放れた。

80 年来、もみにもんだ大問題が、いままさに軌道に乗って、みごとに走り出したところである。

欠点はあるいはあろう。不満もあるいはあろう。しかし、取った方向に、まちがいは万々あるはずがないまでに、熟慮に熟慮が重ねられた結果なのである。完全でないならば、それは、人間の営みだからである。国民は、総持ち寄りでこれのかつぎ進めて行くべきである。足らない所は修正しつつ。ゆがみがあったら直しつつ。

あるいはこれを単なる便宜主義の輕挙妄動^{もう}と断じ、あるいはこれ

をみだりに国の伝統を乱すものと非難する反対意見も、まだあるにはあるが、しかし、だんだんに論述してきたように、現代かなづかいは、決して単なる便直主義に出たものではなく、言語の本質に徴し、国語の歴史に徴して、必然的にこうしなければならない大本に基いて行われた改革である。またこれは、決して古典の伝統を破壊することではなくして、むしろ平安朝古典の時代の人々のとった、「差別のなくなった音をば差別なく」統一して、自由に簡単に、口に合わせて書いて、一朝にして国民文学の黄金時代を現出したその故知にない、その行き方を行くのにほかならないのであって、古典かなづかいを無二のものとして墨守するほうが古典の糟粕そうはくをなめるのみのものであって、田安宗武の道破したように、かえってそれでは古意ではないのである。現代語音に合わせて、もはや区別の無くなったものは、しいて区別をせず、統一されたものは統一して自由に書き下してゆくことこそ、かえって、古典時代の人の精神である。現代かなづかいこそむしろ古典的伝統の精神なのである。

現代かなづかいの決行は、生々発展する日本の国語を生かし、立ち上がる新日本文化の基盤を正しく造り上げる工作であって、これではじめて将来の光明を望むことができるのである。苦しいのは、ひとり言語生活ばかりではなく、衣・食・住、なにひとつ苦しくないものがない試練下である。いたずらに、旧になじんでこの新方向に参じない人は、時代にとりのこされるであろう。50年もたったら、旧かなづかいで教育された人々がなくなって、すべてが新かな

づかいで教育された人々のみになるのである。その時になったら、旧かなで書かれた文学・文献は、さながら、江戸時代のえらい人々が、漢文で著書を書いたり、擬古文で著述をしたりして、今日読みがたからしめて、いたずらにその固ろうを惜しまれると同じ運命をたどらなければならないのである。衣・食・住の窮屈を堪えるのは再興日本のために堪えるのである。私のためではない。そのように新かなづかいに苦勞をするのも、再興日本のために払う現代人の次代に対する義務である。「私」を捨てて、この聖業に参加することこそ、現代人の唯一の言語生活の道でなければならない。

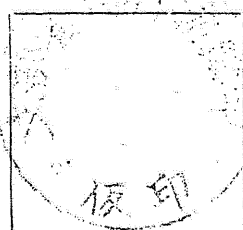
国語シリーズ8

現代かなづかいの意義

MEJ 4038

昭和27年6月10日 印刷

昭和27年6月15日 発行



定価 50 円

著作権所有者 文 部 省

発 行 者 興 石 博

東京都千代田区飯田町1の24

発 行 所 統 計 出 版 株 式 会 社

東京都千代田区飯田町1の24

振替東京 31043 番

印 刷 所 統 計 印 刷 株 式 会 社

東京都千代田区飯田町1の34